



# Sport in Life Award

第3回

受賞プロジェクト  
事例のご紹介

## 目次

### Sport in Life 2023 大賞(最優秀賞)

地域密着型サードプレイスによる「相談・参加・地域づくり」の  
一体的支援事業 / NPO法人クラブしっきーず 02

### 優秀賞 / 企業部門

運動習慣のある社員比率を60%へのチャレンジ  
/ 株式会社システムリサーチ 03

スポーツダーツプロジェクト活動「つくろう！ダーツ部  
応援キャンペーン」と「スポーツダーツ競技大会」/ 株式会社ダーツライブ 04

2022年度 職場対抗ウォーキングイベント / パナソニックITS株式会社 05

### 優秀賞 / 団体部門

障害のある人の定期的なプール活動(健康づくり)  
/ 一般社団法人輝水会 06

大垣北Jrベースボールラボ ~高校生がつくる未来の地域スポーツ~  
/ 岐阜県立大垣北高等学校硬式野球部 07

### 優秀賞 / 自治体部門

LAKE BIWA TRIATHLON IN MORIYAMA / 滋賀県守山市 08

ウィルチェアスポーツ推進事業 / 大阪府東大阪市 09

# 第3回Sport in Life アワード 実施概要

## 実施概要

主催	スポーツ庁 (Sport in Life プロジェクト)
実施期間	◆応募受付 令和5年10月13日(金)～12月4日(月) ◆表彰式 令和6年3月上旬(予定) 会場:都内
応募対象	地方公共団体・関連団体、スポーツ関連団体(スポーツに関する活動を主に実施している団体/競技団体など)、経済団体、学校・教育団体、医療福祉団体、民間企業など、アワード趣旨に賛同いただいている方はどなたでも応募可能です。 ※令和4年4月1日以降で実施された活動を含む取組を基本的な対象とします。
応募要件	上記応募対象に加え、Sport in Lifeコンソーシアムへ加盟いただくことが必須です。 加盟申請がお済みでない方は申請をお願い致します。
募集部門	<input type="checkbox"/> 企業部門 <input type="checkbox"/> 団体部門 <input type="checkbox"/> 自治体部門
応募先	Sport in Life 運営事務局
応募方法	Sport in Life公式ホームページ参照 <a href="https://sportinlife.go.jp/">https://sportinlife.go.jp/</a>
スケジュール	◆応募期間 令和5年10月13日(金)～12月4日(月) → 一次審査(書類審査) <12月> → 最終審査会 <1月中旬頃> → 受賞候補者通知 <1月下旬頃> → 表彰式 <3月上旬予定>

## 表彰



大賞(最優秀賞) …… 1件  
優秀賞(企業部門/団体部門/自治体部門) …… 各3件程度  
Sport in Life 2023賞

## 受賞後の特典

**特典 1** 受賞取組内容を「Sport in Life」ウェブサイト®に掲載!

※<https://sportinlife.go.jp/award/>

**特典 2** 受賞ロゴマークを使用可能!

**特典 3** 各種メディアの他、Sport in Life 関係のWEB媒体・イベント等でも皆さまを紹介!

## 審査

### 5つの評価視点

評価視点	具体的なポイント	(参考)第3期スポーツ基本計画の関連する内容
Sport in Lifeの理念	(1) Sport in Lifeの理念を理解しているか?	スポーツが生涯を通じて人々の生活の一部となることで、スポーツを通じた「楽しさ」や「喜び」の拡大、共生社会の実現など、一人一人の人生や社会が豊かになるという理念
スポーツ実施者の増加	(2) スポーツを行うきっかけづくりにつながっているか?	成人の週1回以上のスポーツ実施率が70%になることを目指す
スポーツ習慣化の推進	(3) スポーツを行う習慣化につながっているか?	1回30分以上の軽く汗をかく運動を週2回以上実施し、1年以上継続している運動習慣者の割合の増加を目指す
スポーツへの親しみやすさ	(4) スポーツへの親しみやすさにつながっているか?	競技に勝つことだけでなく「楽しさ」や「喜び」もスポーツの大切な要素であるという認識の拡大を図る
スポーツの裾野の広がりがやすさ	(5) 企業・団体・自治体のモデルとして他の地域や属性などへの広がりが期待できるか?	—

### 募集する取組アクション(例)

1	子供・若者向けアクション	空き地や生活道路など、子供・若者が身近な場所で自由に運動遊びをする環境を整備した。親子で一緒にスポーツを楽しむ取組が広がった。地域におけるスポーツ機会の確保、生徒の多様なニーズに合った活動機会の充実等を図った。
2	働く世代・子育て世代向けアクション	仕事や通勤をしながら、ちょっとした工夫でできる運動を推進した。子供をきっかけに、親世代のスポーツ実施が促進された。
3	女性向けアクション	日常生活、動作の中で、いつの間にか運動をしている仕掛けをつくった。スポーツの楽しさ、カッコよさなどを入口にスポーツ実施につなげた。
4	高齢者向けアクション	無理のない範囲で自分にあったスポーツを実施した。地域でのスポーツ活動を通じて、世代を問わずスポーツ交流へつながった。
5	障害者向けアクション	誰もが一緒に楽しめる、自分に合わせて楽しめるスポーツを実施した。スポーツを通じて「地域デビュー」することが促進された。

## 審査員

阿部 厚司  
千葉大学 コミュニティ・イノベーションオフィス  
特任専門員/地域コーディネーター  
㈱ミライラボ 取締役COO

伊藤 華英  
一般社団法人スポーツを止めるな理事 1252プロジェクトリーダー

甲斐 裕子  
公益財団法人 明治安田厚生事業団  
体力医学研究所 副所長/上席研究員

河本 敏夫  
株式会社NTTデータ経営研究所 アソシエイトパートナー  
Sports-Tech & Business Lab事務局長

高岡 敦史  
岡山大学大学院教育学研究科 准教授  
合同会社Sports Drive 代表社員

高橋 伸佳  
兵庫県公立大学法人芸術文化観光専門職大学 准教授  
特定非営利活動法人日本ヘルスツーリズム振興機構 業務執行担当理事

中垣内 真樹  
鹿屋体育大学 スポーツ生命科学系 教授  
スポーツイノベーション推進機構  
ヘルス・スポーツプロモーション部門長

原田 宗彦  
大阪体育大学 学長



Instagram

プロジェクト名	地域密着型サードプレイスによる「相談・参加・地域づくり」の一体的支援事業
受賞者	NPO法人クラブしっきーズ

所在地	埼玉県志木市柏町3-3-31-106
URL	<a href="https://shikkys.jimdo.com/">https://shikkys.jimdo.com/</a>

## ①取組の経緯

### 『スポーツと福祉の融合』をテーマに

クラブしっきーズは、文部科学省が策定したスポーツ基本計画に掲げられた『総合型地域スポーツクラブ』として2000年にスタートしました。スポーツやレクリエーション、文化活動などを通じ、『スポーツと福祉を融合したまちづくり』をテーマに、みんなの「あったらいいな」をプログラム化。気がつけば25を超える多チャンネル型となり、市内外で様々な事業を展開し、今年で24年目を迎えます。

地域住民のご理解や応援をいただき、2012年から9年間、空き店舗活用の「しっきーズステーション」を開設。コミュニティカフェの運営やお泊まり会の実施など、『場の持つ力』を十二分に発揮していた時のコロナ禍でした。早期の収束は無理と判断し、小規模分散・屋外開放空間での『地域巡回常設型地域サロン』に移行。しっきーズステーションもコーポに移転し、継続のカタチを貫きました。

コロナ禍における自粛生活によるフレイルの進行、社会からの孤立・孤独に悩む人の増加、人間関係の希薄化など、見えてきた課題に1つずつ丁寧に対応してきた取り組みが、2021年から現在まで続く『地域密着型サードプレイス事業』です。



## ②事業の概要と特徴

### スポーツを通じた支え合いのまちづくり

- ①小学校体育館を会場とした多世代参加型(7歳～90歳代)の体力づくり事業
- ②屋外開放空間(お寺・神社・河川敷・公園等)・町内会館を会場とした地域サロン・放課後の居場所事業です。

どなたでも・予約なしで立ち寄ることができます。  
2021年度2,736人、2022年度2,557人の参加がありました。  
参加費は500円/人、またはお気持ち料募金です。

多世代参加型の事業を「日常的に開き続けたこと」により、運営を若い世代(小学生～大学生・保護者を含めた働き世代)が担うようになりました。また、町内会や地域住民と協力して実施することにより、クラブの活動趣旨(スポーツを通じた支え合いのまちづくり)を理解していただき、クラブサポーターが増え続けています



## ③取組によってスポーツ人口の拡大が期待されるポイント

### 「ないものねだり」ではなく「あるもの探し」を大切に

「スポーツをする・みる」はもちろん、「ささえる」意識が芽生え、やがて喜びに変わります。仲間がいるから会いに行く。名前を覚えてた子が出るから少年野球も観に行く。部活では得られないものがあるから参加する。そんなきっかけが、行動の変容を生み出しています。多チャンネルであることが多様性を受け入れ、共生社会の実現へと歩みを進めることにもつながり、『だれかの為に何かをする』ことが、スポーツの実施率を高めています。

『多世代・多種目・多志向』という特徴を持ち、地域住民により自主的・主体的に運営される『総合型地域スポーツクラブ』は、全国に3,500クラブあります。そして、お寺や神社・公園等も、「どこにでも」あるところに、スポーツ人口拡大の可能性を感じています。

これからも、「ないものねだり」ではなく「あるもの探し」を心掛け、いつも「今」できることと「まちに暮らす人とともにある」ことを大切に歩んでいきます。





プロジェクト名	運動習慣のある社員比率を60%以上へのチャレンジ	所在地	兵庫県豊岡市日高町国分寺158-1
受賞者	株式会社システムリサーチ	URL	<a href="https://www.sr-co.co.jp">https://www.sr-co.co.jp</a>

## ①取組の経緯

### 健康経営から健康マイレージをスタート

当社は、「会社の成長は社員の成長無くしては成しえない。社員が心身ともに健康でやる気に満ちる職場環境を提供することが必要である」という考え方のもと2016年度から健康経営を経営戦略の一つとして位置づけ取組みをスタートさせました。2020年に健康経営優良法人(大規模法人)に認定され、以後連続で認定されています。また2022年には、「兵庫県健康づくりチャレンジ企業アワード」で、最優秀賞の県知事賞を受賞しました。

活動開始当時は、IT企業の職業柄、座っている時間が多く運動不足の解消や、心身のリフレッシュが社員の健康課題となっていました。そこで「歩く」を基本とした健康マイレージ運動をスタートし、歩数計を管理できるスマホアプリ「e3Walker(イーキューブウォーカー)」を社員向けにリリースするとともに、社員にスマートウォッチを貸与し、歩数に応じたポイント付与や、日々の生活習慣改善目標等を実行することで、ポイントを付与して年1回表彰と努力賞を贈呈しています。

このアプリは、兵庫県豊岡市で「とよおか歩子(あるこ)」というスマホアプリとして採用され豊岡市の「歩いて暮らすまちづくり」に貢献しています。具体的な心身の健康づくり活動は、社内メンバーで構成された健康づくり推進委員会を中心に様々な取組みを実施しています。



## ②事業の概要と特徴

### 健康づくり推進委員会を中心に様々な施策を実施

拠点毎や拠点合同の健康づくり活動に助成金を交付し、環境に応じた活動を応援する制度を実施しています。具体的にはリレーマラソンへの参加や、フットサル・スキースノーボード・バドミントン等、社員から希望が多いスポーツイベントの開催、観光地までのウォーキングやプロギング等を実施し、運動不足の解消や世代間・拠点間のコミュニケーション向上に役立っています。また社内のスマホ掲示板を利用して、撮影した活動の動画をスマホで視聴できるようにし、スポーツする楽しさを共有できるようにしています。

健康づくり活動で企画するイベントには、働く世代や子育て世代の社員が、多く参加することから家族や子供のイベント参加も推奨しています。

さらにリフレッシュタイムとして毎日15時に一斉ラジオ体操を実施したり、健康づくりを応援する機器類の整備と、これらを活用した体力測定を実施し、年齢別平均値と実年齢との比較を体感したり、課題の確認等を行っています。2023年からは、社内のスマホ掲示板を利用して、Sports in LIFE様から提供いただいた健康動画を、定期的に発信し、健康づくりの啓蒙活動に役立てています。



## ③取組によってスポーツ人口の拡大が期待されるポイント

### 運動習慣の無い社員への対応

社員の運動習慣比率(自社定義)を60%以上にすることを目標に活動しています。3年前の調査では、運動習慣がある社員は約43%でしたが、最新の調査結果では約56%まで向上し、運動習慣の広がりや、健康づくりへの関心が、少しずつ高まっています。

年2回程度の健康づくり推進委員会から、社員にアンケートを取り、年代別、拠点別の無関心層からの回答を分析し、取り組みやすいスポーツの上位回答を元に、拠点別に助成金を利用したスポーツイベントを実施するように進めています。健康づくり活動を進める上で、インセンティブを効果的に活用することで、運動が習慣化していない社員の行動変容が促進されることを期待しています。

今後は活動目標の達成と、社員全員参加の運動会の実施や、地域のスポーツ大会へのチーム参加の実現に向けて計画を進めています。また、当社の健康づくり活動やスポーツイベントが、地域にも浸透することで、社員とその家族、地域のスポーツ人口の拡大に繋がることに、大きな期待をしています。





プロジェクト名	スポーツダーツプロジェクト	所在地	東京都品川区西品川1-1-1 住友不動産大崎ガーデンタワー
受賞者	株式会社ダーツライブ	URL	<a href="https://sportsdarts.jp/">https://sportsdarts.jp/</a>

## ①取組の経緯

### ダーツを生涯続けられるスポーツの選択肢の一つとして認知拡大

ダーツは、簡単な道具と単純な動作だけででき、老若男女・障がいの有無問わず誰もが同じ土俵で楽しみ、生涯長く続けられるスポーツ。スポーツダーツプロジェクトは、多くの人々がダーツという存在はもちろん、その競技性の楽しさを知り、スポーツの一つとして楽しめる機会の創出を進めている。

今年度は特に、人生の長い時間、ダーツを楽しめるよう、18歳以下の若年層に着目。しかし、現状では18歳以下がダーツに触れられる環境はほとんど無い。

そこで我々は、18歳以下がダーツを知り、頻繁に触れられる機会を創出することを目指し、今回受賞した2施策を含むさまざまな活動を実施。若年層がこれからやっていくスポーツの選択肢の一つに自然とダーツが挙がることを目指している。



## ②事業の概要と特徴

### 若年層がダーツに触れる場と練習の成果を発揮する場の創出

18歳以下がダーツに触れられる場の創出

**つくろう！ダーツ部 応援キャンペーン**（令和5年3～4月、10～11月の2回実施）

18歳以下がダーツを手軽に楽しめる環境として、学校の部活動や地域のスポーツクラブに着目。ダーツをやってみたいという生徒や先生を募集し、ダーツ部設立に関わる知識や用具などを提供し後押し。現在、5校で部活動・同好会が設立、6校で設立に向けて進行中。設立したダーツ部の中には、ダーツのプロ選手が指導等、活動をサポートする学校もある。ダーツのプロは全国に多数おり、アドバイスや協力を仰ぎやすい環境にある。



練習の成果を発揮する場の創出

**スポーツダーツ競技大会**（令和5年8月26日・27日実施）

小学生・中高生を対象とした大会を開催。ダーツ部員の他、普段は地域の児童館で練習する生徒など、中高生の部は計22組44人（小学生の部は10組20人）が参加。東京での開催にも関わらず、茨城県や広島県からの遠征もあった。昨年の同大会を知り、今年の大大会を目標にして練習してきたという参加者もいた。



## ③取組によってスポーツ人口の拡大が期待されるポイント

### 次の目標を提示することで離脱させない

「道具が安価で、広いスペースを必要としないため、導入しやすい」  
「運動に苦手意識があった生徒がダーツ部に入り、スポーツで認められるようになった」と、教職員から評価いただいた。ダーツ人口の増加、延いてはスポーツ人口の増加が期待できる。



現在はプロジェクト活動で生まれたコミュニティを絶やさないような活動も実施。

ダーツはリモートで対戦することができるため、競技大会に遠征した生徒も巻き込んで、学校対抗戦や練習試合を計画中。さらに、コミュニティを世界に広げる活動も進行している。競技大会の上位入賞者で日本代表チームを組み、香港の中高生チームとのリモート試合を実施した。将来的には、参加国数を増やして世界大会にする計画であり、世界大会に出場するために「日本代表」になることがダーツをする若年層の上位目標となる。

ダーツが手軽にスポーツを始めるきっかけとなり、練習して競技大会へ参加、日本代表になり世界大会に出場することまでの筋道を提示することで、若年層の参加意欲を高め、生涯継続できるスポーツとして選ばれるよう、引き続き活動を続けていく。



プロジェクト名	職場対抗ウォーキングイベント
受賞者	パナソニックITS 株式会社

所在地	神奈川県横浜市都筑区佐江戸町600番地
URL	<a href="https://www.panasonic.com/jp/company/pits.html">https://www.panasonic.com/jp/company/pits.html</a>

## ①取組の経緯

### 健康経営推進活動の充実を目指して！

2021年度に初めて経済産業省の取組みである健康経営優良法人に認定され、更なる健康文化を醸成すべく、当年度から健康推進活動を加速するために健康部会を設立。各組織から選出された健康意識の高い健康部会メンバーで手作りの健康推進活動を実施。定期開催イベントとしては、体力チェック、ウォーキング、健康川柳、ヨガ教室等を実施し、情報発信としては、健康推進News、健康まめ知識を定期的に発信することにより、社員の健康意識を向上してきました。今年度は新たな取組みとして眠りピックアップと称した睡眠の質向上イベントも実施し、活動内容を充実させています。これらのイベントや情報発信の全ての活動記録は社内の健康経営ホームページに掲載して、活動記録を残しています。

また、社外講師による各種セミナー(生活習慣、食育、飲酒、食事・睡眠)も定期的に開催しており、年間通して毎月何かしらの健康推進活動を仕掛けてきました。居室内には、体組成計や血圧計、エアロバイクやぶら下がり器などを設置した健康推進コーナー、会社補助もある健康飲料・食品の自動販売機も導入して設備面での充実も図っており、2023年3月には「こんな会社で働きたい」という書籍でも健康推進活動が紹介されました。

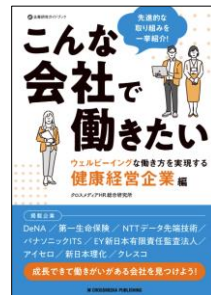
健康経営優良法人の認定は、2024年度も3年連続でホワイト500の認定を受け、充実した健康経営活動を継続しています。このような様々な活動の中で、今回紹介させて頂くのは、職場対抗ウォーキングイベントの取組みとなります。



健康推進コーナー



健康飲料・食品の自販機



## ②事業の概要と特徴

### 職場対抗ウォーキングイベントの概要と特徴

生活習慣改善のひとつとして、運動不足を解消するために毎年秋頃にウォーキングイベントを開催しています。1ヶ月間で歩いた歩数を翌月初めに集計して、個人ランキングと団体戦ランキングを公開して、歩くことに対する動機づけを行っております。

2022年度は取引先にも声掛けして10社/164名が参加、社員参加人数630名(参加率88%)と合わせて総勢794名でイベントを実施しました。

団体戦ランキングの公開方法としては、単なる歩数比較だけではなく東海道五十三次の各宿場に対してどこまで進んだかを表現(図①)して視認性を上げ社員の興味を引く工夫をし、個人戦については全体ランキングの公開だけではなくトップ10のランキングも毎月公開(図②)して歩くことに対する意欲を掻き立てました。またウォーキング中に撮影した自慢の写真を公開する場を設けて、普段からそんなに歩くことに興味を持たない社員でも気軽に参加して頂き、参加人数を増やすことが出来ました。(図③は投稿してもらった写真の一部)

このように、イベントを盛り上げるユニークな取組みを毎年工夫して、社員の参加意欲を盛り立てているのが特徴です。



図① 東海道五十三次で表現した団体戦の状況



図② 個人戦トップ10の状況



図③ ウォーキング中に撮った写真の一部

## ③取組によってスポーツ人口の拡大が期待されるポイント

### 従業員だけでなく、社外も巻き込んだスポーツ実施率の向上を目指します！

ウォーキングイベント終了後のアンケートでは、ウォーキング以外のスポーツ大会の開催を期待する声も多く、今年は6年ぶりに大運動会の開催や、昨年に引き続きフットサル大会や5時間耐久リレーマラソンへの参加も予定しています。一方で、取引先に対するイベント参加の声掛け継続や、室蘭MaaSプロジェクトをきっかけに、地方創生でお年寄りが外出して歩く機会を作るなど、活動範囲として社外にも目を向け、スポーツ実施率の向上に取り組んで参ります。





プロジェクト名	障害のある人の定期的なプール活動(健康づくり)
受賞者	一般社団法人輝水会

所在地	東京都世田谷区奥沢8-30-10
URL	<a href="https://kisuikai.com/">https://kisuikai.com/</a>

## ①取組の経緯

### 障害のある人のスポーツ実施率における背景

スポーツ庁における令和4年12月に実施の我が国の「障害児・障害者のスポーツライフ調査」によると、週1日以上スポーツ実施率は20歳以上で30.9%、7~19歳で35.3%~とあり、年々増加傾向にあるものの、障害のない人の実施率52.3%と比べるとかなり低い数字である。また、障害のある者が利用しやすいように配慮された「障害者スポーツ施設」は全国で114か所(文部科学省, 2016)しかないことを鑑みると、障害のある人々がスポーツを楽しむための門戸は開かれているとは言い難い現状にあることが分かる。当法人の活動拠点でもある東京都世田谷区においても、障害者を対象に年に数回のイベントはあるものの、定期的に参加できる活動はない。特にプールでの活動は、障害のあることで「危ないのではないか」「プールなんてもう無理」と本人もご家族もあきらめてしまうケースを多く目にしてきた。しかし、安心できる施設環境でプールを利用すること、サポートする人の存在があれば、「水中の特性」により、障害のある人が思いのほか自由に動くことができ、また泳ぎにチャレンジすることも可能である。障害のある人にとってプールは、水に入れただけでも自信になり、物事へチャレンジする「心のきっかけ」を作り、社会生活の自立にもつながる場である。

本事業では、障害のある人が地域にある既存のプールを利用し定期的な水中活動を行う場と機会を定着させた。



## ②事業の概要と特徴

### 実施方法と参加数

**【方法】**本事業は一部日本損害保険協会の自賠責運用益拠出事業の助成金を用い、交通事故や脳血管障害による片麻痺や先天性の脳性麻痺など後遺症等の障害のある人を対象に、定期的にプールでの活動が行えるよう、活動の場を作り定着させた。内容は1回40分、プログラムは当法人の「アビリティエクササイズ®」と名付けたメソッド(①水中リラクゼーション②水中ストレッチ③筋力運動④泳ぎへの導入)を、個々の状況に合わせて組み合わせて行った。また、単発で泳ぎを導入したいと願う地方へ出向き、サポート者育成の講習会と体験会を行った。

**【参加人数】**活動日/第2・4火曜日9:30~、毎週水曜日①9:30~②10:20~、第2・4金曜日。4月30名・5月30名・6月30名・7月30名・8月24名・9月54名・10月30名、計228名が参加した。

**【参加者の声】**「体力がついた」「プールの帰りは杖歩行の足が軽い」「思いの外自由に動くことができる」「麻痺があっても泳げるようになり自信がついた」「介助が楽になった(家族の声)」



## ③取組によってスポーツ人口の拡大が期待されるポイント

### 今後の課題と展望

**【今後の課題】**障害があることによって定期的にスポーツを当たり前に楽しむという行動は大きく制限される。本事業は参加者の「コロナ禍でも活動を続けたい」という声を重んじ、安全に配慮しながら活動を続けることを実現してきた。地域にあるプールを利用することで誰もが参加でき、同時に活動を持続可能なものにするために、サポートできる人材の育成を行った。当初から一緒に楽しみながら参加することで、双方向な相互理解が生まれた。膨大な経費をかけずとも地域にあるインフラを利用することで、障害のある人の通いの場をつくるのが可能であり、それは障害による二次的健康被害の防止にも役立つため必要性があると考えられる。本事業はあくまでも当法人がスポーツ傷害保険などに加盟の上で執り行う「障害のある人のインフォーマルな取り組み」であるため、「送迎がない」「参加費を支払うことに負担を感じる」等の要望を持つ「介護サービス等により安価でサービスを受けている人」を含めて福祉活動を行う場合は、収益性を見込む事業とは成り得ない。

**【展望】**今後は、スポーツを実施することによって障害のある人がもう1歩前に進むための心のきっかけづくりになることを仮説検証し、活動の場が心理的变化(社会生活自立)につながることを明らかにしたい。その上で当法人の支援技術を用いて、国や行政のご支援を頂き全国の地域における障害のある人のスポーツ実施率(年1回の参加を70%を、健常者と同等の実施率を目指す)を高める取り組みに力を注ぎたいと考えている。



プロジェクト名	大垣北Jrベースボールラボ～高校生がつくる未来の地域スポーツ～
受賞者	岐阜県立大垣北高等学校硬式野球部

所在地	岐阜県大垣市中川町4-110-1
URL	<a href="https://www.instagram.com/ogakikita.bbc.since1899/">https://www.instagram.com/ogakikita.bbc.since1899/</a>

## ①取組の経緯

### 高校生が地域課題解決に取り組む

本校は令和6年度に学校創立130周年を迎える長い歴史と伝統を有する普通科高校です。野球部も創部125年を迎えます。「大垣北Jr(ジュニア)ベースボールラボ」は、岐阜県大垣市が策定している「大垣市未来ビジョン」がきっかけとなりスタートした、地域課題解決に取り組む活動です。野球部員が「小・中学生の運動能力、運動時間の低下に関する新聞記事」を見たことがきっかけで始まりました。コロナ禍により加速した小・中学生の運動離れは地域のスポーツ少年団の団員数減少にも影響を与えています。市の野球少年団に登録している小学生は直近10年で3分の1まで減少をしました。少子化が進行し、かつコロナ禍により運動時間減少、加えて少年団加入状況も悪化しました。このような現状を受け、全国の高校で実施されている「総合的な探究の時間」を通じ、企画・立案をし、部員同士で案を練り、動き出しました。



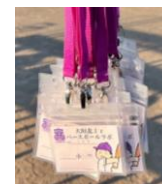
## ②事業の概要と特徴

### 高校生考案のオリジナルメニューが地域話題に！

ラボは2～3週間に1度、平日の放課後の時間に実施をします。事前にID登録をした小学生が、マネージャー作成のIDカードをぶら下げ、来校します。当日の動きはメニュー考案含め、全て高校生が主導で行います。ウォーミングアップではベースボール5(ファイブ)、体力テストが近い時期は50m走や立ち幅跳びのメニューが組まれました。陸上部員もラボに参加し、走り方、トレーニング方法を伝えるなど、他部の協力も得られています。シーズンに入れば、実践練習、オフシーズンには基礎的な練習やトレーニングの要素も取り入れた遊びなど、時期に応じたものを実施しています。疾走タイムを正確に測定する光電管センサーや投手の球速や質を測定する機器(ラブソード)を活用し、小学生の能力の現在地を知り、必要となる練習やトレーニングの考案へと繋げています。

その他にも、高校生と共に勉強をする時間、野球に関するルールや知識を学ぶ座学の時間も取り入れています。練習の最後にはミーティングを行います。褒めるだけでなく、話の聞き方、切り替えの仕方、継続することの重要性などを、大人ではなく高校生から伝えています。

ラボの特徴は年間を通じて継続的に成長をサポートするシステムです。当初、小学校2校、ID登録者50名で始まった取組みですが、現在では小学校14校、ID登録者150名まで増加し、これまでの実施回数は18回、参加者は延べ580名を超えました。皆勤参加者もいます。6年生最後の参加時には修了証が渡されます。



## ③取組によってスポーツ人口の拡大が期待されるポイント

### 異年齢交流が放課後の日常を変える！

ラボの取組は小学生や高校生の日常に変化をもたらし、運動能力の向上を目指し、地域スポーツの活性化を図り、小学生、高校生の成長を促します。スポーツや学習に対する**内発的動機付けから**、継続したくなるシステムや日常を作ります。近年の情報環境の充実、効率的な学びによって、高校生が持つ可能性は無限大であり、地域のスポーツ発展に大きな貢献が可能であると考えます。高校が地域のハブ的な存在となり、環境と人材を駆使し、地域と密接な繋がりを構築していくことが各地域で実現することを願っています。

子供たちの日常的な運動習慣を、経済的な負担を強いることなく、また、大人ではなく、年齢の近い高校生がきっかけを作り、**学校全体で受け入れる体制を作ることができれば、将来の子供達の成長は大いに見込めます。**長きに渡る歴史と伝統を受け、これからのスポーツ界の更なる発展に繋がる取り組みを今後も継続していきます。







プロジェクト名	LAKE BIWA TRIATHLON IN MORIYAMA
受賞者	守山市

所在地	滋賀県守山市吉身2丁目5-22
URL	<a href="https://lbt.biwako-moriyama.com/">https://lbt.biwako-moriyama.com/</a>

## ①取組の経緯

### 自転車を通じたまちづくり、スポーツへの参画意識の醸成へ

滋賀県守山市は、滋賀県の南東部、琵琶湖大橋の袂に位置し、人口約8.5万人、面積55km<sup>2</sup>。京阪神のベッドタウンとして人口増加基調にあり、特に30代から40代の子育て世代、学生や子どもと若い世代が多い、活気あふれるまちです。

2015年地方創生の柱に「自転車を軸としたまちづくり」の実現を掲げて以降、日本一の湖“琵琶湖”を自転車で一周する「ピワイチ」を軸に観光振興を進めるなか、2019年国土交通省から第一次ナショナルサイクルルートに「ピワイチ」が指定されたことも背景に、国内外からサイクリストの訪れる発着地の町として盛り上がりを見せています。

地域においても、市民や市内事業者への自転車購入補助制度を2016年度から継続して実施するほか、2023年で8回目を迎える市内を自転車で周遊する「モリイチ・スタンプラリー」は毎年500人が参加する秋の人気イベントとして定着するなど、地域の高齢者や親子など、多世代が自転車を通じ、スポーツに参画できる地域の意識醸成にも取り組んできました。

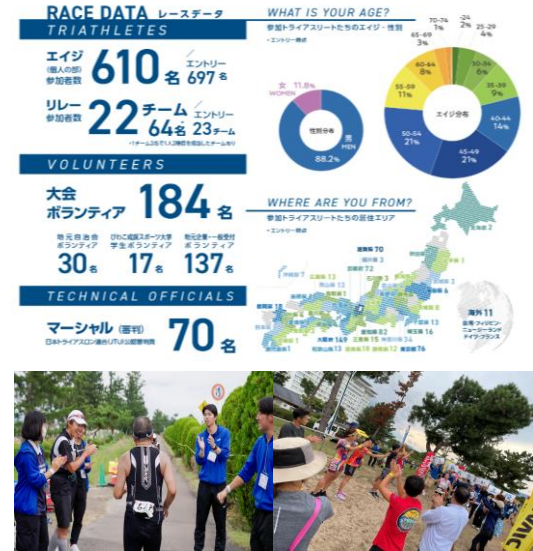
こうした中、自転車を含め琵琶湖の魅力ある資源を活用して、さらなる地域活性化を目指し、行政や民間、地域で連携して実行委員会を組織し、「LAKE BIWA TRIATHLON」と題してトライアスロン大会を3年連続で開催しています。官民連携でトライアスロンの取組みを開始しました。



## ②事業の概要と特徴

### 「最高の挑戦、全員が主役」！ダイバーシティ&サステナブルの実現！

- この大会は琵琶湖や美しい田園風景をコースとし、コンセプトを『最高の挑戦、全員が主役』と掲げ、スポーツの素晴らしさを伝えることはもちろん、大会開催が人の挑戦を受け入れ、ダイバーシティ&サステナブル実現につながる点にも注力しました。
- 参加者数は年々増加し、業界で有名なトライアスリートはもちろん、老若男女、国内外から多様な世代に参加いただくほか、重い病気を抱える方や義足の選手といった、他の大会では参加が難しかった方々も安全に参加できる仕組みを整えてきました。また、大会実施前の夏休みには、大会の主会場を舞台に、小学生を対象とした水泳とマラソンで構成されるアクアスロンも開催し、親子世代への情報発信や将来的な競技人口増加も目指した活動も実施しています。
- さらに、地域住民や地元学生、県内外からの企業の賛同者も毎年増加し、大会の成功を支えるとともに、特に環境意識の高い県民性を有する滋賀県での開催を受け、市と大会、協賛企業が連携して、輸送効率化や競技実施時のゴミのリサイクル推進等のサステナブルな活動を推進したことで、選手、地元、企業等から参画してよかった、また来年度も参加したいと高く評価を受けています。



## ③取組によってスポーツ人口の拡大が期待されるポイント

### 参加者、支えるスタッフ、地域や企業、官民で参画できる仕組み！

#### 1. 多様な参加者、世代参加への働きかけ

「する・観る・支える」、全員が主役と掲げるとともに、世界に誇る大会実現に向けた2025年度までの将来ビジョンを広く共有する中で、国内外から大会に参加・参画したい賛同者が多く集まり、地域住民や、親子世代へのスポーツ参画への機会づくりにも貢献しました。

#### 2. スポーツイベントとしての価値向上と社会的価値向上の実現

大会の抱える課題に対して賛同いただく企業に協力・参画いただき、官民連携の取組を実施したことで、大会の開催自体が地域・社会に対してインパクトを与え、スポーツ・健康・環境への意識向上につながるとともに、結果的にスポーツイベントとしての効率的な運営と価値向上にもつながりました。

#### 3. 行政と民間の役割分担

行政も積極的に関与し、特に道路使用などの許認可申請や情報発信、地元調整への技術的な助言、調整を行うことで、民間や地域が主導して事業に取組みやすい地域環境づくりにつながりました。





プロジェクト名	ウィルチェアスポーツ推進事業
受賞者	東大阪市

所在地	大阪府東大阪市
URL	<a href="https://www.city.higashiosaka.lg.jp/">https://www.city.higashiosaka.lg.jp/</a>

## ①取組の経緯

### スポーツのまち東大阪

東大阪市は、ラグビーの聖地・花園ラグビー場を中心にスポーツによる賑わい創出、地域活性化をめざす「スポーツのまち」です。

2027年に関西で開催予定のマスターズ世代の国際大会「ワールドマスターズゲームズ」では、花園ラグビー場がラグビー競技の会場となっており、準備を進める中で、大会理念「スポーツ・フォー・ライフ 人生を豊かにするスポーツ」、そしてコンセプトの一つとされる「世代・地域・文化がつながる」という考えに共感し、スポーツを通じて誰もが一緒に楽しむことができる社会をめざすため、気軽に安全にウィルチェアスポーツを楽しむことができる専用コートとして、令和3年2月に「東大阪市立ウィルチェアスポーツコート」を設置しました。

コートを中心にウィルチェアスポーツを推進する施策を展開しているところです。



## ②事業の概要と特徴

### 「誰もが一緒に」楽しむことができるスポーツ！

東大阪市ではウィルチェアスポーツを「障害者スポーツ」ではなく、健常者も含めて「誰もが一緒に」楽しむことができるインクルーシブなスポーツととらえており、すべての方をターゲットにウィルチェアスポーツを普及しています。

平成29年度に市がウィルチェアスポーツに関心を持ち、コートの試行版である広場の運用や体験イベント等に取り組み始め、ウィルチェアスポーツコートが完成した令和2年度以降は、コートを中心に以下の取り組みを行っています。

#### ①ウィルチェアスポーツを「する」「みる」イベントの開催

(一社)日本車椅子ソフトボール協会と連携協定を締結し、全国大会、国際大会を開催。また、車椅子ソフトボール以外にも様々な種目での体験を実施します。これらのイベントは、市の大規模イベントと同時開催し、集客を図っています。

#### ②子どもたちへの普及

市内小学校で授業の一環としてウィルチェアスポーツの体験を行っています。希望校数は初年度である平成30年度の8校から、令和5年度は29校となりました。



## ③取組によってスポーツ人口の拡大が期待されるポイント

### ウィルチェアスポーツによる新たな賑わいの創出

ウィルチェアスポーツコートは、花園ラグビー場の他にも様々な文化・スポーツ施設が集まり、市の賑わいの中心となっている花園中央公園内に整備しました。

他の大型イベントと組み合わせると開催がしやすく、コートのオープン当初のウィルチェアスポーツイベントへの参加者は、参加前からウィルチェアスポーツに関心の高い方や関係者が大半でしたが、徐々に偶然立ち寄った方も観戦や体験に参加して下さるようになり、選手達との交流による新たな賑わいも生まれています。

また、大きな大会の際に国内外から選手、スタッフが東大阪市を訪れることで、スポーツツーリズムにも繋がっています。